

第二章 『古今集』の恋歌について

『古今集』の恋歌における時間的な対照表現を分析する前に、『古今集』恋歌の本質、構造、表現上の特質などについては先に把握する必要がある。本章の第一節では恋歌の本質を考察してみたい。その本質を踏まえて、第二節では『古今集』恋歌の構成を確認したい。また、第三節では『古今集』恋歌における時間性の表現の特質について見てみたい。

第一節 恋歌の本質

さて、「恋歌」とは恋を詠む和歌なので、「恋歌」の本質を問うために、「和歌」の本質を先に把握しなければならない。

和歌の本質について、『古今集』の仮名序¹では次のように定義している。

やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。
世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見る
もの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙
の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。

すなわち、紀貫之は、人の心を種とし、その種から生じて口に出た無数の葉のようなもので、人々の見たこと、聞いたことに託して心に思っていることを言い表したというのはすなわち和歌の本質なのだとして理解しているのである。

同じく、和歌の本質に関わる論説として、片桐洋一氏には次のような指摘がある²。

和歌は外界の事物を模写するものではなく、人の心が主体で、人

¹ この引用は小沢正夫、松田成穂校注・訳『新編日本古典文学全集 11—古今和歌集』（小学館、1994、p17）による。

² 片桐、同前掲注7論文。

の心を外界の事物に託して表現するものだと言っているのである。

片桐氏は紀貫之と同様に、和歌を、人の心を外界の事物に託して表現するものとして捉えていると見られる。

また、和歌について、増田繁夫氏は次のように論じている。

歌の本質については、人の心が外界の事や物にふれて感動し、その感動した心が言語として形象されて表出したもの、いわば歌は人間の生命活動そのものであり、生命の活動としての表現行為なのだと考えられている³。

すなわち、和歌とは人の心が外界の事や物にふれて感動したものを言語にしたものという。

以上の諸氏の論説をまとめてみれば、いずれも人の心を詠むという点に直目し、和歌の本質と効用を捉えていることが認められる。

ところが、和歌は単なる人心を詠むという効用だけではない。増田繁夫氏によれば、「平安時代の貴族文化の大きな特徴である優雅さともものやわらかさといった性格は、もっぱら人々が和歌を詠む過程ではぐくまれ洗練されていったものであるということができ」といい、和歌は、「貴族文化の美意識の基本を形成していった」（傍点は筆者によるもの、以下同）ものなのだという⁴。このことから、和歌は平安貴族社会の形成には重要な意義を持っているよう。

ところが、このような和歌は、無論平安時代の頃に生まれ出されたものではない。『万葉集』には既に数々の和歌が認められるのだから。ただし、『万葉集』時代の和歌は、「和歌」というよりは、いまだ歌謡的な性格を多分に残した「うた」とでも呼ぶべきものである⁵が、平安時代の和歌の特色は洗練さと優雅さにあるとされ、特に、『古今集』には、概念化や抽象度の程度の大きい言語が

³ 増田繁夫「古今集と貴族文化」（『古今和歌集研究集成第1巻—古今和歌集の生成と本質』所収、風間書房、2004）。

⁴ 増田、同上掲注16論文。

⁵ 増田、同前掲注16論文。

使われたという和歌の特色が持たれているのである⁶。要するに、和歌は『万葉集』時代にも認められるが、『古今集』時代においてはさらに概念化にされ、平安文化の形成に深く関わっているものとして捉えられよう。

以上の考察をまとめてみれば、すなわち、和歌とは心を種として詠まれたものであり、人間の心から発したもののなのである。このような和歌は王朝文化における重要な要素であるだけでなく、平安文化の美意識の形成にも重要な働きをしていると認められるのである。

さて、こうした人間の考えと思いを言葉に託したものとしての和歌は、恋人達の中に重要な効果を持っているのは言うまでもない。このことは、和歌を通して互いの思慕を伝えることが王朝時代には多く見られるという点からも分かるのであろう。

さて、果たして恋とは何物か。『広辞苑』には「一緒に生活できない人や亡くなった人に強くひかれて、切なく思うこと。また、そのころ。特に、男女間の思慕の情。恋慕。恋愛。」⁷と述べており、『大辞泉』には「特定の異性に強くひかれること。また、切ないまでに深く思いを寄せること。恋愛。」⁸と解釈した。さらに、『岩波古語辞典』には「ある、ひとりの異性にひかれる切ない心持。」⁹と定義した。これらの記述によれば、「恋」とは人に惹かれる切ない心持を意味していると見てよかろう。

人に惹かれて恋に落ちてしまった人は常に恋の歌を詠むのだが、恋の歌とは、すなわち「男女の恋愛に関する歌、恋情の切なさをよんだ和歌」¹⁰なのである。恋歌には作者の悲しみや切なさがよく詠まれているが、それこそ「恋歌」の「本質」なのだと思われよう。

そして、このような恋情の切なさを詠んだ歌は、『万葉集』においては主に「相聞」の中に含まれていたが、『古今集』においては恋歌一から恋歌五まで

⁶ 増田、同前掲注 16 論文。

⁷ 新村、同前掲注 4 書、p 875。

⁸ 松村明監修、『大辞泉増補新装版』（小学館、1998）p 873。

⁹ 大野晋等編『岩波古語辞典補訂版』（岩波書店、1990）p 525。

¹⁰ 新村、同前掲注 4 書、p 876。

の五巻に収まっている。本論は『古今集』を研究対象としたため、恋歌一から恋歌五までの五巻の歌々を中心に考察したい。

第二節 『古今集』恋歌の構成

上述した恋歌の本質の問題を踏まえて、ここでは『古今集』恋歌の構成を考察してみたい。

『古今集』は最初の勅撰和歌集として、延喜五年（905年）に、奏覧成立し、以後改修が続けられたものとして知られているが、その撰者は紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑であるとされる。

『古今集』は歌数約一一一〇首で、二十巻からなる。部立ては、春（上下巻）・夏・秋（上下巻）・冬・賀・離別・羈旅・物名・恋（巻一～巻五）・哀傷・雑・雑体・大歌所御歌が見られる。その中で、恋歌は三百六十首あり、恋一から恋五までの五巻に収録されている。

『古今集』の恋歌について、片桐洋一氏は巻別によって、その配列の特色を考察したことがあるが、氏はその考察結果を箇条書きに示している。その箇条書きをそのまま引用すると、次のようになる¹¹。

【恋一】

- (1) あやめも知らぬ恋（四六九）
- (2) 音に聞く恋（四七〇～四七三）
- (3) 逢えぬ人を恋う（四七四～四七五）
- (4) かすかに見た人を恋う（四七六～四七九）
- (5) 距離があって会えぬ人を恋う（四八〇～四八六）
- (6) 恋いぬ日はない（四八七～四九〇）
- (7) たぎる恋心を塞きかねる（四九一～四九五）
- (8) 表わさなかった恋心を色に出したい（四九六～四九七）
- (9) 鶯・時鳥・蚊遣火に寄せる恋（四九八～五〇〇）

¹¹ 片桐洋一『古今和歌集全評釈』（講談社、1998）。参考ページは、p 274、p 420、p 544、p 674、p 820 である。

- (10) 忍びかねる恋 (五〇一～五〇五)
- (11) 逢うよしのない恋 (五〇六～五〇七)
- (12) 苦しい恋、憂き思い (五〇八～五三七)
- (13) 片恋の苦しさ (五三八～五四二)
- (14) 夜は、ただ泣くばかり (五四三～五四六)
- (15) 恋心を表わしたいと思う (五四七～五四九)
- (16) 雪でも消える我が思いの火 (五五〇～五五一)

【恋二】

- (1) いまだ逢えぬ恋の苦しみ (五五二～五五九)
- (2) 知る人なき片恋い (五六〇～五六六)
- (3) ひたすら逢いたいと思う (五六七～五七一)
- (4) 「人恋ふ涙」「音に泣く」 (五七二～五八二)
- (5) 日夜物思うが、逢えず (五八三～六〇〇)
- (6) 「つれなき」人への怨み (六〇一～六〇三)
- (7) 押さえ難い我が恋心 (六〇四～六一〇)
- (8) 「逢ふ」ことをひたすら願う (六一一～六一五)

【恋三】

- (1) 言葉を交わすが逢えず (六一六)
- (2) 「逢ふよしなし」の嘆き (六一七～六二〇)
- (3) 「逢わぬ夜」が続くのを嘆く (六二一～六二四)
- (4) 「逢ふことな」く、立ち帰る (六二五～六二六)
- (5) 「逢ふことな」きに「無き名」立つ (六二七～六三一)
- (6) 「行けども逢えず」 (六三二～六三三)
- (7) やっと逢ったが、夜は短い (六三四～六三八)
- (8) 「逢ひて」帰った後、後朝の歌 (六三九～六四八)
- (9) 「名は立てじ」 (六四九～六五三)
- (10) 「人目を気にする」 (六五三～六六〇)
- (11) 「忍びに逢ふ」「下に思ふ」 (六六一～六七一)
- (12) 「忍ぶ恋」遂に表われ、「名立つ」 (六七二～六七六)

【恋四】

- (1) 逢った後も、なお恋しさ切実 (六七七～六八五)
- (2) 深く思う思いは変わらず (六八六～六八八)
- (3) 愛する人を待つ (六八九～六九四)
- (4) ただ「見たし」「逢ひたし」と願う (六九五～六九七)
- (5) 「並みにはあらぬ我が恋」 (六九八～七〇〇)
- (6) 世間の雑音を問題にせず (七〇一～七〇四)
- (7) 「移り気」や「いつわり」をとがめる (七〇五～七一五)
- (8) 忘れようとしても忘れられない (七一六～七一九)
- (9) 深い心で思っているのだと弁解 (七二〇～七二四)
- (10) 「うつろふ心」を怨む (七二五～七二七)
- (11) 「心うつろはず」「離れず」と弁解 (七二八～七二九)
- (12) 昔を思い出して恋い、「逢ひたし」と思う (七三〇～七四〇)
- (13) 別れが近づく (七三六～七四二)
- (14) 別れた人の形見 (七四三～七四六)

【恋五】

- (1) 過ぎ去った恋愛を回顧 (七四七～七四九)
- (2) 厭われる身の憂きを歎く (七五〇～七五七)
- (3) 君が来ぬ夜 (七五八～七六一)
- (4) 音もなし (七六二～七六四)
- (5) 忘草 (七六五～七六六)
- (6) 夢にも見ず (七六七～七六八)
- (7) 来ぬ人を待つ (七六九～七八〇)
- (8) うつろいゆく心、離れてゆく人 (七八一～七八九)
- (9) 離れてゆく人を思い、物に寄せて歎く (七九〇～八〇四)
- (10) 「身を憂しと思ふ」 (八〇五～八〇六)
- (11) すべては「我から」のことという「あきらめ」 (八〇七～八〇九)
- (12) 今は「人知れず絶えむ」ことを願うばかり (八一〇～八一一)
- (13) 絶えてしまった後の感懐 (八一二～八一九)

- (14) 「秋」に寄せる思い (八二〇～八二四)
- (15) 仲絶えて年ふる (八二五～八二六)
- (16) 流れて「あきらめ」の底に落ちる (八二七～八二八)

このような配列からは、氏は恋の進行に注目していることが分かる。氏の指摘した配列を通して、恋人達の間には、「音に聞く恋」「片恋の苦しさ」「押さえ難い我が恋心」といった忍び恋の段階を経て、「やっと逢ったが、夜は短い」「深く思う思いは変わらず」「愛する人を待つ」といった逢瀬の成就の段階に至ったことが分かる。つづいて、「移り気やいつわりをとがめる」「うつろふ心を怨む」という相手の変心する段階を経て、「別れが近づく」という二人が別れる段階に入ったことが認められる。それから、別れても、「来ぬ人を待つ」ことが続いているうちに、未練の段階に入ることとなり、そのうえ、「絶えてしまった後の感懐」をしながら、「仲絶えて年ふる」とあるように、恋をあきらめめる段階に至ったのである。このように、氏は『古今集』の恋部の配列を、恋愛の進行に沿って考察していたことが明らかに読み取れるのである。

氏の指摘を踏まえて、恋部の内容は次のように考えられよう。

恋一とは、いまだ会わざる恋を詠嘆し、揺れ動く心を物象に託して描いた巻である。恋に落ちて、忍ぶ恋に我慢して、恋心を表わしたい、といった心情を詠んだものである。

恋二とは、独り寝の歌・涙の歌を集中させて「不逢恋」の精髓を捉えた巻である。逢えない苦しい日々が続くこと、日夜物思っても逢えないこと、万難を排して逢おうと決意をあらたにすることなどが詠まれたものである。

恋三とは、逢瀬前後の恋の進展を表現する巻である。逢わぬ夜が続く、なき名が立つ、初めて逢う一夜、後朝の辛さ、浮名を恐れ、逢い難い日々、浮名が立つなどの恋の時間的進行が見られる。

恋四とは、刻々と移ろう恋の様相を段階的に捉えた巻である。燃焼して次第に冷却に向かう恋愛心理の表現を詠まれたものである。

恋五とは、恋の終焉を詠嘆する巻である。来ない人を待つ心情、離れて行く人への思い、あきらめの境地に至ることなど、恋の終焉を詠んだものである。

以上のような考察を通し、『古今集』恋歌は恋の初期から破局まで、恋愛進行のプロセスによって配列され、その中、時間性を持つという特色を有していることが分かるのである。言い換えれば、『古今集』恋歌の配列には濃厚な時間性が見られるということである。

一方、恋歌の構成について、松田武夫氏と菊地靖彦氏の研究が挙げられる。松田武夫氏は「不会恋、会恋、会不会恋」という説を唱えた。氏は『古今集』恋歌全体を次のように三つの段階に区分している¹²。

不 会 恋	恋一～恋二……百四十七首
会 恋	恋三～恋四・七〇一番歌まで……八十六首
会不会恋	恋四・七〇二番歌～恋五……百二十七首

このような分類もまた『古今集』恋歌五巻を、恋の進行に従ってアレンジされたものとしているのである。

これに対して、菊地靖彦氏は「恋の前期、成就期、後期」という説を唱えた。氏によれば、『古今集』の恋部の歌は次のような構造となっている¹³。

恋愛前期……恋一、恋二	一四七首
恋愛成就期……恋三、恋四(701 まで)	八六首
恋愛後期……恋四(702 から)、恋五	一二七首

氏の指摘からも、『古今集』の恋歌の配列は恋愛進行の時間性と深く関わっていることが伺われる。

一方、氏の分類によると、「恋愛成就期」の歌は八六首あるが、その中、逢った夜の歌は三首しか認められない（恋三 634～636）。このことは如何に理解すればよからうか。やはり、『古今集』恋歌の重点は氏の指摘したとおりに、

¹² 松田、同前掲注 13 書、p 75。

¹³ この引用は菊地靖彦『古今的世界の研究』（笠間書院、1980、p 161）による。

恋の成就の詠嘆ではなく、忍ぶ恋や悲恋などを詠む所にあると理解してよかろう。このように理解すると、恋の切なさ、逢えない苦しさを詠嘆することは、まさに恋歌の本質なのだと捉えられよう。

以上のように、「不会恋、会恋、会不会恋」説にせよ、「恋の前期、成就期、後期」にせよ、いずれも、『古今集』の恋歌は恋愛の進行プロセスによって配列されたものと見ているのである。ここにおいて『古今集』恋歌には、時間性が重要な要素なのだと認められるのである。このことから、時間性という要素を考察するのは『古今集』恋歌の解明には重要な意義を持っているといえるのではないか。

第三節 『古今集』恋歌における時間性の表現

以上のように、『古今集』恋歌の構成には「時間性」の問題が重要な要素なのだと考察してきた。

さて、その時間性の問題は如何に歌に表現されているのか。本節では、この問題を考えてみたい。

『古今集』の持つ時間性について、窪田空穂氏は『古今和歌集評釈』の「古今和歌集概説」¹⁴において、次のように指摘した。

古今和歌集の和歌を通覧して、前にいった人事と自然とを一体として渾融させている事と相並んで、第二に、最も際立って感じられる事は、一切の取材を時間的に扱っているという事である。すなわち一たび触れた事象は、それが人事であっても自然であっても、次いで、それを永遠なる時の流れの上に浮べ、その事象も時と共に推移しつつあるものである事を認め、その上で、それに依って起って来る感をいうという詠み方である。もとより一切の事象は、空間と時間との範囲に存在しているもので、それを離れては存在しない。和歌の取材になるものも、その双方に跨っての

¹⁴ 窪田空穂『古今和歌集評釈（下）』（東京堂、1937）p3。

もので、如何なる和歌も空間と時間との両面を持っている。しかし和歌そのものの歴史から見ると、万葉集の短歌は、空間に力点を置いたものである。その取材を扱うに、時間の方はつとめて短く切り縮めて、これを一瞬間の印象にとどめ、反対に空間の方は、つとめて如実にしようとする扱い方である。その結果は、いずれも抒情詩の範囲のものではあるが、客観味の多い、集中的な、時には感覚的なものとさえなっている。古今和歌集の和歌は、それとはまさに反対なものである。その取材を時間的に扱おうとする所から、空間的の一面は第二のものとなって、事象そのもの姿は背後に隠れ、淡く稀薄なものとなるが普通で、時は抒情の言葉を通して連想する事によって、初めて捉え得るものとさえなっている。これに反して時間的の一面は強く現われて、いずれの取材も、永遠の時の流れの上に浮んで、推移の道を辿りつつあるものであるという事を連想させて、その出来ばえによっては、一種の觀念に墮しおわっているものもあるが、優れたものに至っては、時間的な味わいが余情となって添っているものがある。(下線は筆者によるものである。)

氏は『万葉集』との比較を通して、『古今集』の時間的な問題を論述した。氏によれば、『万葉集』の短歌は、「空間に力点を置いた」ものであり、その取材を扱うには、「時間の方はつとめて短く切り縮めて、これを一瞬間の印象にとどめ」という。すなわち、『万葉集』の時間の取り扱い方は時間を短く切って、瞬間的な時間を把握しているのである。さらに、全体的には時間の方よりも空間の方が重視されていることが分かる。

これに対して、『古今集』の和歌は「その取材を時間的に扱おうとする所から、空間的の一面は第二のものとなって、事象そのもの姿は背後に隠れ、淡く稀薄なものとなるが普通で、(中略)時間的の一面は強く現われて、いずれの取材も、永遠の時の流れの上に浮んで、推移の道を辿りつつあるものである」というように、『古今集』は時間的な一面が強く現れ、時間の推移の道が重視

されるという。

こうした氏の指摘を踏まえれば、『万葉集』には空間的な特質を持つのに対して、『古今集』は時間的な特質を持つのだと見ることができよう。さらに、時間の取り扱い方に関しては、『万葉集』は「一瞬間の印象」が重点だが、『古今集』は時間の推移が重点なのだと捉えられる。

氏の言った「一瞬間の印象」と「時間の推移」という概念は、和辻哲郎氏の論『万葉集』の歌と『古今集』の歌の相違について¹⁵という論文にも認められる。それに関係のある内容を取り上げてみると、次のようになる。

古今の恋の歌は、恋の感情を鋭く捕らえて歌うよりも、恋の周囲のさまざま情調を重んずることになる。（中略）しかし直接的な詠嘆より離れて、幾何かの余裕を保ちつつ、恋の心理を解剖しあるいは恋の情調を描くというこの古今の傾向は、必然に歌人の注意を「瞬間の情緒」よりもその「情緒の過程」の方に移させる。すなわち瞬間の情緒の告白である歌よりも、その情緒の歴史を描くところの物語を欲する。（中略）万葉の歌人（中略）は人目をはばかる恋を一つの鋭い瞬間において表現することはできるが、その恋全体を背景としてそこににじみ出る心の影を軽く現すというごとき技巧は知らぬのである。（傍点は和辻氏、下線は筆者によるものである）

この論文において、和辻氏もまた窪田氏と同様に、『万葉集』と『古今集』の内包する時間性の相違に着目し、『万葉集』の「瞬間の情緒」と『古今集』の「情緒の過程」を指摘したのである。

一方、こうした時間の取り扱い方の相違は、二書の配列から見れば、自明であろう。

『古今集』を代表するのは四季の歌と恋の歌だが、四季の部には「春歌」「夏

¹⁵ 和辻哲郎「万葉集の歌と古今集の歌との相違について」【初出は『日本精神史研究』（岩波書店、1926）。のちに『和辻哲郎全集第四巻』所収（岩波書店、1962）】。

歌」「秋歌」「冬歌」とあるように、季節の順により配列されている。その主題内部も、「立春」「雪」「鶯」「若菜」などのように時の推移に従ったのである。そして、恋の歌のほうは第二節で検討したように、恋の初期から破局までという恋愛進行のプロセスによって配列されている。

これに対して、『万葉集』は二十巻からなるのだが、『万葉集』の歌の配列について、次の平沢竜介氏の指摘が示唆的である¹⁶。

『万葉集』には歌の詠まれた年代順に歌が配列されている箇所が多く認められるが、これら年代順の配列も時間的配列といえはいえないこともない。だが、『古今集』におけるように歌を四季別、あるいは恋の進展の諸相別に配列し、そのような配列が可能になるには撰者達のより高度な時間の推移に対する意識が前提となる。やはり、『万葉集』年代順の配列は、その前段階の時間意識に基づく配列といわざるをえないであろう。(中略)『万葉集』巻八、巻十はそれぞれ春雑歌、春相聞、夏雑歌、夏相聞、秋雑歌、秋相聞、冬雑歌、冬相聞、というように四季に分け、さらにそれぞれの季節を雑歌、相聞に分けるといふ配列が施されている。(中略)『万葉集』巻八や巻十の配列は四季別に分類するという点では、『古今集』ほど精密に季節の推移を写し取ろうとする姿勢は認められない。

ここにおいて、氏は、『万葉集』巻八、巻十における雑歌と相聞歌に存在する時間性を見出し、雑歌と相聞歌が時間によって配列されていることを認めていると同時に、『万葉集』巻八、巻十以外の歌々は、年代順によって配列されていることも指摘したのである。さらに、年代順による配列されている歌々には、『古今集』のような時間の推移への高度な意識が認められないと論じた。のみならず、氏もまた、『万葉集』の四季の歌の内部には、『古今集』のように

¹⁶ 平沢竜介「古今集の時間」(『古今和歌集研究集成第3巻—古今和歌集の伝統と評価』所収、風間書房、2004)。

季節の推移に従って「立春」「雪」「鶯」「若菜」などの物象が配列されるという構造がないと述べているのである。氏の論述に従えば、『古今集』時代の人々は『万葉集』時代の人々に比べて、時の推移に敏感になったと分かるのであろう。

さて、『万葉集』の相聞歌には、『古今集』恋歌のように恋の進行過程によって配列されるものがあるか。この問題について、伊藤博氏は『万葉集の歌群と配列』において、「二六二〇～二六二六の七首は、恋の始まりから終りまでの過程を追っての配列と見ることができる」¹⁷と指摘した。

氏の指摘からは、『万葉集』には恋愛の進行過程により排列されたものがあると認められる。しかし、それと同時に、二六二〇番歌から二六二六番歌まではわずか七首であるとのことによって、この七首以外のものは、恋愛の進行過程により排列されたものではないことも示されていよう。前述したように、『古今集』恋部にある三百六十首の歌はすべて恋の過程を追って配列されているのだが、『古今集』と『万葉集』との配列状況を比較してみれば、大きな差が存在することが分かる。要するに、『万葉集』と『古今集』は七対三百六十であり、前者は後者の 1.9%ほどであり、2%未満なのである。このことから、時間的な要素は、『古今集』に非常に重視されており、『古今集』の持つ特質の一つといえよう。したがって、『古今集』の歌を鑑賞する場合、時間的な視点は不可欠だといえよう。

以上の考察を通して、『万葉集』と『古今集』との時間の取り扱い方が異なっていることは明白に読み取ることができる。要するに、『万葉集』には「瞬間的な時間」に重点が置かれており、『古今集』には「時間の推移」が重点なのである。

さて、『古今集』の恋歌にとっては、こうした「時間の推移」は如何なる恋人達の情緒の変化を起こさせたのか。それは如何に歌に表現されているのか。

¹⁷ 伊藤博『万葉集の歌群と配列（上）』（塙書房、1990）p16。

前章で述べたように、「今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな」（恋四、六九一）という素性法師の名歌には、「朝」と「夜」の対照が読み取れる。そして、在原業平の名歌「月やあらぬ春や昔の春あらぬわが身がひとつはもとの身にして」（恋五、七四七）という歌には、「今」と「昔」という対照が存在する。なお、小野小町が詠んだ「思ひつつ寝ればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを」（恋二、五五二）など一連の「夢」の歌にも、「夢」と「うつつ」との対照も認められる。このように、恋人達の情緒の変化は「朝と夜」、「夢とうつつ」「昔と今」などの対照表現において明らかになる。言い換えれば、『古今集』の恋歌には「時間の推移」という特質が見られるが、その特質は、「朝」から「夜」までの心情の転換、「昔」から「今」までの恋情の変化、目を覚めている時間から寝ている間までに移行するという「うつつ」と「夢」との情緒の反映、などの過程に示されているのである。このことから、『古今集』恋歌は時間的な対照表現から分析できるものであり、さらに時間的な対照表現には「朝と夜」、「夢とうつつ」「昔と今」といった三つの主題が重要なのだといえよう。

第四節 まとめ

以上のように、歌の本質とは、人の心を詠むことだが、恋歌とは、すなわち恋の切なさを詠むものである。『古今集』の恋歌にもこういう恋歌の本質を持っていることはまず確認できる。ただし、『古今集』の恋歌にはこの恋歌の本質を示すのに止まらず、『古今集』の恋歌には時間性という要素が示されており、恋歌の配列は恋愛進行のプロセスによって配列されるのであり、その配列には時間の推移が認められるのである。この点は、『万葉集』とは大きく違っているのである。『万葉集』と『古今集』との違いを改めてまとめて言えば、『万葉集』は空間に力点を置き、如実に扱うが、時間を瞬間の印象にとどめるものである。これに対して、『古今集』には時間的の一面が強く現れて、空間を第二のものとなるものである。つまり、『万葉集』の歌で示されている時間性は「瞬間的」であり、『古今集』の歌で示されている時間性は「推移的」な

のだと見られる。言い換えれば、『万葉集』の恋の歌は瞬間的な感動を訴えることに対して、『古今集』の恋の歌は、時間の推移につれて恋の経過を見て今の心情を語るものなのである。

以上の考察を通して、歌の内容からも、部立ての配列からも、『古今集』恋歌には濃厚な時間性が示されているといえる。さらに、このような時間性をめぐって、『古今集』の恋歌には「朝と夜」、「夢とうつつ」、「昔と今」など、時間的な対照表現が用いられたことが認められるのである。この論理に従えば、『古今集』の恋歌を考察する場合には、恋歌の持つ時間性に注目し、対照表現から分析する作業が重要であろう。

一方、『古今集』に関わる時間的な対照表現に関しては、「朝と夜」、「夢とうつつ」、「昔と今」、「今と将来」、「長と短」などの主題が認められるが、本論では、歌数が少ない「今と将来」、「長と短」といった二つの主題を省略し、「朝と夜」、「夢とうつつ」、「昔と今」といった主題だけを取り上げ、恋歌を解析したい。そして、この三つの主題はそれぞれに第三、四、五章で検討する。